

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

【氏名】高木丈也

【所属】東京大学大学院 人文社会系研究科 韓国朝鮮文化専攻

【研究題目】日本語と朝鮮語の中途終了発話文 ―生起要因、機能を中心に―

### 【研究の目的】

本研究は、日本語と朝鮮語の自然談話に現れる「中途終了発話文」の出現について分析することにより、両言語における文末構造の生成メカニズムの差異の一端を示すことを目的とするものである。

本研究で扱う「中途終了発話文」については、談話分析の中でも記号表現上の経済性を基調とする見方が存在するほか、関連性理論、選択体系理論などといわれる広義の認知言語学の研究対象にもなっている。しかし、現在提出されているこれらの接近法やそれらによって導き出された一応の結論は、センテンス以上の単位を想定していながらも、その論理における究極のモデルはあくまでも形態・統語論でいうところの「完全文」に置かれており、センテンスにおける特定の構成要素を「非標示」とする根拠から発話者の意思や選択が切り捨てられてしまっているという問題点を抱えている。そこで、本研究では、当該形式を形態・統語論や談話構成論といった観点のみならず、話者の言語使用における主体的側面や機能論的観点からも精密に分析し、その出現における両言語の差異を明らかにすることを目指す。

### 【研究の内容・方法】

研究の方法としては、属性や社会的関係に配慮した話者による2者間自然談話(日本語談話、韓国語談話ともに異なり話者42名による計21談話)を採集し、それを文字化した資料を用いた。調査の枠組みは大枠では金珍娥(2006)にならい、文字化にあたっては、宇佐美(2007)の「改訂版:基本的な文字化の原則」を援用しつつ、あいつち発話の扱い方などに関しては、それを独自に改良した文字化システムを採用した。また、会話を文字化する範囲と時間は、各談話とも最初から7分00秒とした。さらに、必要に応じて、随時フォローアップアンケートを実施し、被験者の内省を問うた。

分析にあたっては、上記の音声資料、文字化資料、フォローアップアンケートへの回答を主たる分析対象とし、形態・統語論、談話構成論、機能論といった観点からそれぞれ分析を行った。

形態・統語論的分析にあたっては、両言語の品詞分類に関しては、日本語文法における分類法を基本的には用いつつも、用言の活用形に関しては、①終止形、②接続形、③連体形、④名詞形、⑤引用形という韓国語文法における分類法を用いた。

機能論的分析にあたっては、大きな枠組みとしては、ザトラウスキー(1993)における13の発話機能の分類に従って、分析を行った。

### 【結論・考察】

分析の結果、明らかになったことは以下のとおりである:

①日本語の中途終了発話文の形態論的下位分類は、韓国語のそれよりも多い。また、統語論、談話構成、発

話機能という観点から見たときに、日本語の同形式は談話において、より広い使用域を持つ発話規則として存在している。

②各言語の内部において、談話における発話文の出現は、規範文法の体系と必ずしも一致するものではない。また、両言語において、並行する文法形式においても、談話の発話文末における使用をみると、互いに異なった出現状況を示すことがある。

③ザトラウスキー(1993)における発話機能の分類により、当該形式を分析したところ、(1)日本語でより現れるもの(⑥情報要求, ⑩言い直し)、(2)朝鮮語でより現れるもの(③情報要求, ④意志表示)に分類することができる。

また、両言語で類似した体系を持つ形式であっても、「発話機能」という観点から見たときに、その使用域が異なる場合があったが、このことから、談話レベルにおける発話文の生成規則は、規範文法における文生成規則とは必ずしも一致しないということも明らかにされた。